



## 「ふるさとという川のひとしづく」

大館市教育委員会 教育長 高橋 善之

2月14日、十二所地区の「かまくらやき」に出かけた。長年途絶えていた小正月行事が地元の方々により数年前から復活されたとのこと。夕刻、周囲の雪壁に穿った幾十もの小さな雪洞に蝋燭が点され、広場の篝火を中心に50人ほどが集った。角館の「火ぶりがまくら」と同様、2mほどの縄を結わえた俵に火をつけ身体を中心に回す火祭りであるが、十二所では俵の中に落葉樹の枯葉が仕込まれている。周りに勧められ、私も火振りに参加した。片手で縄の端を高く掲げ、緩急をつけると安全かつ制御もしやすい。火炎の輪の中の空間は眩い光と熱気が渦巻き、風切り音と発火音が入り混じった「ゴー・ゴー」という音に原始の感性が蘇える。火の粉は、菅江真澄が「雪上に紅葉」と評したごとくに紅く舞い散る。お年寄りも昔日を懐かしむようにゆったりと、父親世代は勇壮にぶんぶんと、そして、子どもたちは元気にくるくると回す。熱い甘酒を啜りながら、先人の願いとふるさとの原風景を次の世代へと伝えるべく、「かまくらやき」復活にかけた地元の方々の静かな心意気に深く共感を覚えた。

その帰り道、上川沿地区にあるGSに立ち寄り給油をしていたら、反対側で給油中の車から降りてきた女の子に「こんばんは！」と声をかけられた。あわてて挨拶を返し、「どこの小学校ですか？」と尋ねると、上川沿小の2年生だという。「ああ、いいあいさつができますね。」と誉めると、すっと近寄ってきて私を見上げながら「あなたは、立派な人ですね！」と誉めてくれた。給油が終わり、さよならしてその子は自分の車に戻ったが、それにしても小学校2年生に「立派」と誉められたのは人生初めてのこと。大人たちの心に勇気と希望を呼び覚ます春の息吹のような力、それは子どもだけに備わっている不思議な力である。

「大館の未来を切り拓く人財の育成」を目的となし、「ふるさとキャリア教育」を根幹とする教育を展開し始めて3年になる。幸いなことに、志を同じくする方々とのネットワークも次々と繋がり、当面の目標であった教育機関による0～20歳までの「縦の一貫」、学校を核とした地域社会・産業界との「横の連帯」の構築も大きく進展した。「ふるさとキャリア教育」の理念と独創性は県内外からも高く評価され、文部科学大臣表彰を始めいくつもの全国表彰をいただいた。しかし、それはあくまで余録である。「ふるさとキャリア教育」の究極の目的は、未来社会として具現されるものであり、その前提として、現在の地域社会や子どもたちの中に、その目指すべき姿が形成されていかなければならないと考えている。

執務室の直下に米代川が流れる。大館盆地のすべての河川がそそぎ込み、豊かな水流となり西へと下る。盆地を取り囲む山々から湧き出す水を源とし、古来より乾期にも厳冬期にも水枯れしない川である。「かまくらやき」の復活も、あの女の子の振る舞いも、ひとしづくの水としてふるさとの川へと流れ込んでいく。私も、ふるさとという川の一滴でありたいと思う。